

地域循環共生圏を考える

—阿蘇の草原維持と都市・農村の暮らしの共生—

熊本大学 熊本創生推進機構 編集

阿蘇の草原を事例として、「地域循環共生圏」という自然の保護と調和の取れた新しい暮らしのあり方を考えます。

熊本大学・政策フォーラム2019

地域循環共生圏を考える

—阿蘇の草原維持と都市・農村の暮らしの共生—

2019年9月4日 熊本大学・くすの木会館で開催

熊本大学 熊本創生推進機構 地域連携部門

はじめに

第1章 このフォーラムの企画趣旨

第2章 「自然資本と社会関係資本に着目した
地域循環共生圏の重層性構築」

第3章 「地域循環共生圏形成のための『学び』について」

第4章 「阿蘇の暮らしと幸せの研究」

第5章 パネルディスカッション

熊本大学・政策フォーラム

共催：日本地域政策学会・九州沖縄支部フォーラム

地域循環共生圏を考える

- 阿蘇の草原維持と都市・農村の暮らしの共生 -



日時：令和元年9月4日（水）午後1時30分～5時

場所：熊本大学・くすの木会館（熊本大学黒髪北キャンパス）

どなたでも参加できます。入場無料。（12時30分開場）

13:30 シンポジウム：地域循環共生圏を形成するために

・ 一ノ瀬友博・慶應義塾大学教授

「自然資本と社会関係資本に着目した地域循環共生圏の重層性構築」

・ 田中尚人・熊本大学准教授

「地域循環共生圏形成のための『学び』について」

・ ウォルフラム・マンツェンライター・ウィーン大学教授

「阿蘇の暮らしと幸せの研究」

パネルディスカッション：一ノ瀬教授、田中准教授、マンツェンライター教授、

内田安弘阿蘇持続可能な社会研究所・所長

コーディネーター：上野真也熊本大学教授

15:30 ネットワーキング・ブレイク

16:00 研究発表

・ 大淵 和憲（九州産業大学 伝統みらい研究センター）

「九州地区における伝統工芸産地の新たな振興手法の考察 - 従来型支援からの脱却の動きに注目して -」

・ ヴィルヘルム・ヨハネス（熊本大学 熊本創生推進機構）

「南阿蘇村における牧野の管理 - 進行中のプロジェクト報告」

17:00 閉会

お問い合わせ：熊本大学・熊本創生推進機構

096-342-2041 | sesoken@kumamoto-u.ac.jp

 Kumamoto University





口絵 1 出演者たち



口絵 2 会場風景

はじめに

熊本大学 熊本創生推進機構・准教授 安部 美和

皆さん、こんにちは。熊本大学政策フォーラムにご来場いただき、ありがとうございます。このフォーラムは、熊本大学、および日本地域政策学会・九州沖縄支部との共催で開催いたします、

私は、本日のフォーラムの司会を務めさせていただきます熊本大学・熊本創生推進機構の安部美和です。どうぞよろしくお願いたします。

本日のフォーラムは、シンポジウムとして「地域循環共生圏を形成するために」をテーマに、一ノ瀬友博・慶應義塾大学教授、田中尚人・熊本大学准教授、ウォルフラム・マンツェンライター・ウィーン大学教授の3人に最新の阿蘇研究をめぐる論点についてお話しをいただきます。そのあとのパネルディスカッションでは、発表いただいた三方と、内田安弘・阿蘇持続可能な社会研究所長にも参加していただき、上野眞也・熊本大学教授をコーディネーターとして、地域循環共生圏や草原保全について議論を深めて参ります。

パネルディスカッションのあとには、研究報告いただいた先生方とご来場の皆さん方とのネットワーキング・タイムも予定しております。どうぞ最後までお楽しみください。



第1章 このフォーラムの企画趣旨

熊本大学 熊本創生推進機構 教授 上野 眞也

まずはじめに、本日の政策フォーラムの企画趣旨を説明をさせていただきたいと思えます。本日のフォーラムは、「地域循環共生圏を考える―阿蘇の草原維持と都市・農村の暮らしの共生―」というタイトルにいたしました。「地域循環共生圏」ということはまだ耳慣れないものかもしれませんが、現代社会は地球規模の環境問題や資源の枯渇、わが国の人口減少や高齢化、あるいは逆に発展途上国の人口爆発など、これまでの右肩上がりに発展してきた世界観を新たなものにしていかねばならない状況に直面しています。

大学でも、さまざまな分野の研究者がこれらの問題について研究を進めています。一般的に、私たち研究者というのは、それぞれ自分たちの学問のフレームワークを持っていて、そういう枠組で世界を見ていく傾向があります。しかし現代の問題は単一の学問的な知だけでは対応が困難な複雑な様相を呈しています。いま環境省はSDGsへのわが国の対応策のひとつとして「地域循環共生圏」という新しい概念で環境政策を進めようと



ております。本日のフォーラムのテーマである阿蘇の草原保全問題も、環境と共生しながら、私たちの暮らしの質を上げていくための新しい政策研究テーマ・フィールドとして選ばれ、全国の多くの大学と共同して研究を進めているものです。今日はその一端を皆様方にご紹介したいという意味もあつて企画いたしました。

阿蘇というと、皆様方はどういうイメージをお持ちでしょうか。北海道のようなとか、アメリカのようなとも言われる広大な草原と、世界一大きいといわれるカルデラ火山があります。カルデラの中に市や町があり、沢山の人が暮らしています。こういう風景は、ずっと昔から続いてきて、それは自然に成り立っているものだと思ってきました。私も最近、勉強をし始めて知ったことで、いまは知ったかぶりして話をしていますけれども、あの雄大な阿蘇の景観は、人と自然が関わり合いながら作られてきた半自然環境です。阿蘇や大津方面に行きますと、土地が黒いですね。農

作業をしますと、爪の中が真っ黒になるくらいで、地元では黒ボクと呼ばれています。熊本地震の後、あちこちで断層が現れたりしている所から地層を見ると、何層にも黒い地層が入っているのが分かります。研究者によりますと、約1万年くらいの昔から、そういう黒い地層が入っているんだそうです。

これは何を意味するのでしょうか。黒い地層は火山の噴火などによって自然にできているのではなくて、その土地は、草地に火をつけて燃やしてきた人の歴史の積み重ねが黒ボクの地層として生み出されてきたのです。1万年前というのは縄文時代より前から、阿蘇地域では人々が阿蘇の草原を使つて暮らしてきた。草は田畑を作るにあたつては肥料になります。牛馬を使うしか技術のない時代には、大切な牛馬の餌になります。あるいは家の中で火をおこす芝や薪として、床を敷くわらとして、屋根には茅葺きするなど、戦後まで草は人が生きていくための貴重な資源でした。阿蘇郡西原村では、つい最近までされていたそうですが、いわゆる草原のネザサを編んで織られ、有明海のノリを乾かすための道具として活用していたそうです。草原というのは、非常に多様に使われてきた歴史がありました。

でも、戦後すぐの日本の山の風景写真を見ますと、ちよつと驚くんですが、日本中、はげ山です。やはり薪や芝を取りに行くというのは、戦後においてもプロパンガスが家庭に普及するまではとても重要な地域資源の活用方法だったのです。だからこそ、いまでも阿蘇地域では、外輪山や中央火口丘のある緑豊かな所でも、それぞれの地域集落ごとに草原や牧野

の縄張りがあります。底地は市町村のものだったり、あるいは個人の共有地になっていたり
とさまざまですが、封建時代、鎌倉や室町時代から地域の方々は、その土地を共有地とし
て使って草を利用してきた歴史があるわけです。そしてその草原、原野の管理は、今も営々
と地元の集落の責任で続けられてきました。さすがに今では手も足りなく、野焼きボランティア
などの応援も受けています。

草原を利用していく上で、二つの重要な観点があります。一つは、阿蘇地方などでは、今
も豊かな水の湧く地域ということで、地下水をとめて誇りに思っているわけです。こういう水、
雨水が表流水になり、地下水になっていく過程において、人々はいかに水を管理するかとい
うことに一生懸命、知恵を絞ってきました。ですから、棚田を作り、あるいはため池を作り、
順番に高い所から低い所へ水を引いていく中で、地域の景観というのは整備され緑豊かな地
域として潤ってきました。そういう豊かな「水の制御技術」、こういうものは地域の人々の協
働によってまかなわれてきた歴史があります。

それからもう一つ、阿蘇地域でも重要な観点は、どういうふうにも「草のコントロール」
をしてきたかということ。草自身は地域の財産でもあったわけですが、放っておけば阿
蘇のようなモンスーン地域では、数年もたちますと灌木が生えてきて森に変わっていきます。
こういうものは毎年、早春に草原を焼くことによって、4月ぐらいにはきちんとした青い芽
が吹いてくる。こういう草をきちんと「火でコントロール」していく技術が阿蘇地域では発

達してきました。それは地域で生きていく上で必要な技術・知恵であったたわけですが、これが阿蘇地域の特有な景観を作り出していく重要な役割を果たしてきました。

地域自身が、そして地域コミュニティの人たちが生き抜いていくために、水と草と火をうまく制御しながら、阿蘇地域の景観がつくられてきた。人工的にそれは形成されてきて、1万年近く、それは続いてきた。しかしながら、草を使うという経済活動があまりなくなっってしまった現在、こういう自然と人の暮らしが織りなす草原の管理が、いま崩壊し始めています。放牧とか、景観保全のために何とかしましょうという試みはいろいろやられていますが、現実的に経済活動的な見方からすると、人々が草をコントロールしていく意欲が少し薄れてしまうような時代になりました。

現代では、牛馬は、軽自動車やトラクターに替わってしまいました。もう農家では、牛や馬は農耕や運搬用には飼われなくなりました。専ら牛は、肉用とかミルク用でしか育てない状況となっってしまった現在において、草をどう管理していくのかは大きな課題です。これまで阿蘇で営々と築かれてきた人と自然が関わってきた半自然環境の生態系を、どう今後も持たせていくかということが私たちの研究テーマになります。阿蘇の希少植物や動物もとても重要ですが、地域資源としての草原を放置して、次第に森林にしてしまうのではなく、なんとか今の草原というかたちで、阿蘇から九重に続くあの広大な草原地帯を守れないのか。一万年以上も維持されてきた草原を草原たらしめてきた地域の営みが、人口減少や高齢化、

あるいは都市化、ライフスタイルの変更などで、今後は継続できなくなりつつある。もし地域コミュニティの草原を維持していくための力が弱ってきているのであれば、何か別の方法で応援してあげることができないだろうか。

今、熊本市は地下水保全のために、熊本市民の水道料金の一部を使って、大津や菊陽・西原地域で水田の湛水事業を行っています。地下水の涵養地域で水田に水を張り、水を地下の帯水層に浸透させていくことを促進するという、非常に広域での地下水保全活動が行われています。また俵山の近くの西原村では、熊本市がたくさん木を植えて、水源涵養林として地下水を増やすような活動も展開されています。都市と農村が共存を探る素敵な政策実例です。では草地という観点で見ますと、今のところ、草地を守って、美しい国立公園をつくって維持していただけているのは、地域の方々の努力に負っています。それを楽しんでいる私たち都市住民との間には、実はあまり関係性がなくて、都市住民は水の恵みを受け、美しい自然を単に楽しみに行くだけのフリーライダーになっているといつてよいと思います。

経済的な議論だけで草原の持続可能性を語るの間違いかもしれないです。阿蘇の草原を守っている集落の方々の話を伺うと、たぶん、地域の方々は草地まで含めて自分たちの暮らす環境であり、特に経済的価値がなくなっても、それを守っていくところに、その生き方、自然とともに暮らす美しい生き方の根本があると了解されているということを感じます。

今日は、全然違う分野の研究者が集まって、それぞれのフレームワークで阿蘇を語ってい

たきます。しかしもしかすると、現地の方々には私たちが外から見て分析するようなフレームワークとは違う意味合いで、草地の重要性、自分たちにとつての草地のあり方ということについてお考え方があるのかもしれない。そういうことについても、皆さんとともに議論する中で、新しい視角を発見していけたらなと思っています。

では早速、一ノ瀬先生のお話を伺いましょう。



第2章 「自然資本と社会関係資本に着目した地域循環共生圏の重層性構築」

慶應義塾大学 教授 一ノ瀬 友博 氏

皆さん、こんにちは。今、ご紹介いただきました慶應義塾大学の一ノ瀬と申します。タイトルが少し硬い感じですが、でも、「自然資本と社会関係資本に着目した地域循環共生圏の重層性構築」ということでお話しさせていただきますと思います。

今日、私が一番バッターでお話しする内容は、「地域循環共生圏」という非常に新しい言葉についてです。皆さん、まだあまりなじみがないと思いますけれども、環境省が昨年度つくった第五次環境基本計画の中で、非常に重要な位置付けがなされた考え方・アイデアです。簡単にそのバックグラウンドと、環境基本計画に何が書かれていて、その中に地域循環共生圏というのはどのように位置付けられているかということについてお話ししたいと思います。

それから、実は私たちが阿蘇で始めているプロジェクトについて、上野先生ももちろんメンバーですが、簡単にご紹介したいと思います。

最初に、これは環境省の資料そのまま、細かい字のところは見られないかと思いますが、お手元の資料を見ていただきたいと思います。特別、変わったことが書いてあるわけでもなく、国内外、非常にたくさんのおさまな問題があつて、そういう問題にいろいろ対応

していくために、新しい基本計画を作りましたということ、昨年の4月に第五次環境基本計画が政府で閣議決定をされています。



その中に、これからお話しする地域循環共生圏が出てくるんですけども、最近、話題になってきているのだと、SDGs。あるいは、ESG投資だったりなど、いろいろな社会状況が変わってきている。そのような中で、地域循環共生圏というアイデアで地域のことを考えてみたらどうかというので、この第五次環境基本計画の中で生まれてきたものです。ちょっと言葉はまだ普及していませんが、「環境・生命文明社会」を指すということが国の計画として書かれています。環境基本計画では、地域循環共生圏というものが環境省が目指す新しい基本計画のかなりの部分を実は占めています。

なので、ある種、環境省にとってみると、鳴り物入りで取り組むことになった基本的なアイデアということです。その地域循環共生圏について、少し重複して

いますけれども、もう一度、お話ししようと思
います。

地域循環共生圏の図には都市と農山漁村が
セットで描かれています。実は環境省の政策提
議では、これよりも一つ前に、「森里川海連携
（「つなげよう、支えよう森里川海）」というも
のをやっています、そちらのほうがもう少し
なじみがあるかなと思います。その中では特に
流域圏を想定して、上下流連携みたいなことを、
必ずしも流域圏の中だけではないですけれども、
ここ数年、環境省が盛んに取り組んできたん
ですね。なので、その拡張版というか延長と考
えると、もう少し地域循環共生圏というのが分
かりやすくなるのかなと思います（図1）

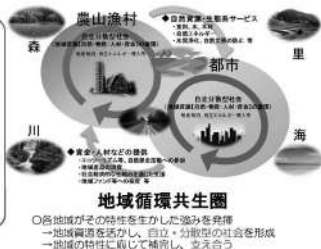
だいたい都市というのは、流域の中でいうと
低地部に成立していきまして、上流部には農山村



第五次環境基本計画の基本的方向性

目指すべき社会の姿

1. 「地域循環共生圏」の創造。
2. 「世界の範となる日本」の確立。
※ ① 公害を克服した歴史
② 優れた環境技術
③ 「もったいない」など循環の精神や
自然と共生する伝統
を有する我が国だからこそできることがある。
3. これらを通じた、持続可能な循環共生型
の社会（「環境・生命文明社会」）の実現。



本計画のアプローチ

1. SDGsの考え方も活用し、環境・経済・社会の統合的向上を具体化。
 - 環境政策を契機に、あらゆる観点からイノベーションを創出
→ 経済、地域、国際などに関する諸課題の同時解決を図る。
→ 将来にわたって質の高い生活をもたらす「新たな成長」につなげていく。
2. 地域資源を持続可能な形で最大限活用し、経済・社会活動をもう向上。
 - 地方部の維持・発展にもフォーカス → 環境で地方を元気に！
3. より幅広い関係者と連携。
 - 幅広い関係者とのパートナーシップを充実・強化

図1. 第五次環境基本計画

があつたりするわけです。なので、都市には非常にたくさん人口がありますけれども、この人口がたくさんある都市は上流部、あるいは中山間地域といわれる所の自然資源に依存して都市が成立しています。それで、それぞれを切り出して別々に考えるのではなく、循環圏と捉えてセットで考えようということが基本的なアイデアです。

例えば、ご承知のように、川だって小さい川もあれば、大きい川もありますし、当然、流域圏みたいなものを越えて、人のつながりがあることも当たり前であるわけです。文化的に峠を越えて、向こう側と交流していたこともあります。ただ、ここではあまり流域は強調されていませんが、森里川海連携のときには、もう少し川というのが前面に出てきていました。

環境省は今まで、もっぱら環境のことを扱ってきたわけですが、さらには物質循環から経済まで、自然環境の中でいろいろエネルギー、ここで言うエネルギーは人間が使うエネルギーというより、生態系の中のエネルギーみたいなものですけれども、物質やエネルギーが循環しているだけではなくて、お金がその中に実は回っているんだということまで、環境省が扱うということです。いずれにしても、一つのつながりの中で考えれば、都市と農村がお互い支え合うような関係にあつて、両方が一緒にやることは、マルチ・ベネフィットと書いてありますけれども、お互い win-win の関係で、かつ、いろんなことに、よくシナジー効果といったりしますけれども、相乗効果が生まれてくるのではないかということなのです。

環境省が「曼荼羅図」と呼ぶ、地域循環共生圏を一枚絵で表したものが図2です。その



図2. 地域循環共生圏

中に幾つか環境省が考えていることが書いてあります。これまでの環境省とは思えないような斬新なこともいろいろ書いてあって、特にIoT (Internet of Things) とか、Society 5.0とか、そんなことは環境省に関係があったのかということもいろいろ書いてあります。それをもう少しかみ砕いて、私たちの議論のテーマに少し寄せてみます。

たぶんキーワードとして、その中に出てくるのは、「自律分散」「相互連携」「循環・共生」という言葉です。その背景には、昔はいわゆる全国総合開発計画というものがあって、都市に集中するのではなく、広域生活圏を形成しようという構想が当時、提案されていました。日本の国土のいろんな所にちゃんと人が住めるようにしているということとです。

ところが、人口減少が問題になってくると、総務省の施策ですけれども、「定住自立圏」、あるいは国土形成計画では、「多自然居住圏」などが提案されてきました。いわゆる圏域の議論が昔からずいぶんされています。

先ほどの曼荼羅図に書いてあるのは、エネルギー、防災、ビジネス、ライフスタイル、交通というのを取り上げられています。それぞれ環境省がこれまでやってきたもの、エネルギーはもちろん環境省は扱いますが、防災、ビジネス、ライフスタイル、交通分野は環境省の所管かみたいな、ほかの省庁ではないのかという分野のことも書かれています。

今日はあまりお話しできないんですけども、欧米では最近、土地ネクス研究が盛んになされていて、限られた自然資源、水とか食料とかエネルギーとか、自然環境、生態系みたいなものは、お互い、どっちを立てれば、どっちか立たないみたいなきっかけが起こりますので、そういう相互作用、あるいはシナジー効果をいかに起こすかと云うことに取り組まれています。それに似たようなものではあるかなと思います。

防災の話はまた後でしようと思いますが、いずれにしても環境省がSDGsとかESG投資というものを考えて企業との連携を目指す、ビジネスまで言及するようになってきたのかなと思っています。

これが前段の最後ですけれども、ここで話ししているような地域循環共生圏というものを日本全国でチャレンジしましょうということで、自治体やいろんな団体に対して、地域循

環共生圏づくりプラットフォームというものの公募を今年度初めにやって、35自治体が最終的に選ばれました。

実は、このうち南阿蘇村で一つ、小国町でも取り組みが選定されています。このように、地域で取り組むという話と、この次にご紹介するのは、私たちはもう少し、曼荼羅図は夢物語みたいに書かれているところがありますが、実際に特定の地域でそもそも地域循環共生圏というものが、どのように把握され、どのように地域の持続性につながるのかということ、研究ベースでやってみようということ、今年（2019）4月から動き出しました。実際に私たちが始めていることを少しご紹介しようと思います。

そこで取り組んでいるタイトルが、「阿蘇をモデル地域とした地域循環共生圏の構築と創造的復興に関する研究」ということです。全体のリーダー兼テーマ1のリーダーは、九州大学の島谷（幸宏）先生、河川工学、防災のご専門で、非常に有名な先生です。テーマ2は、東海大学の市川（勉）先生、地下水がご専門です。最後のテーマ3は私がリーダーをしています。テーマ3の中に3つのサブ研究グループがあり、上野先生をはじめ、今日ご登壇いただく先生方にメンバーとして入っていただいています。

この阿蘇研究テーマは、課題自体は環境省が設定して、私たちが研究者として選ばれるかたちですけれども、環境省の思いとしては、先ほどみたいに国全体の政策課題に対して新しいコンセプトでアプローチし、環境省が地域づくりまで踏み込もうということを始めました。

まず最初のプロトタイプとして、環境省は阿蘇を選んだということです。阿蘇で一体どういう可能性があって、あるいはどんな具体的な問題があるのかということをも多角的に見てみようということになっています。それぞれのテーマを簡単に紹介して、私たちの話をしようと思います。

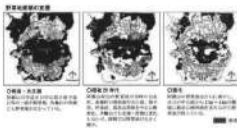
背景として、阿蘇の場合、2012年に水害があって、ようやくある程度、一息つけたかと思ったら熊本地震が来ました。そういう災害と、あるいは、もちろん根底には人口減少という高齢化の大きな問題もありますので、そういう中で一つは「創造的復興」というテーマがあります。それに加えて、「地域循環共生圏」というもので、どのように持続的な地域をつくっていくのかということです。

ご承知のように、阿蘇はそもそも九州の半分以上の都市の水がめになっている所であります。なので、水というのは、阿蘇を考える上で切っても切り離せないものです。特に福岡の大都市圏は、流域には入っていないですけれども、福岡都市圏250万人の人もその水の一部、3分の1程度ですけれども阿蘇山系からの水を飲んでる。もう一方で、後で出てきますけれども、草原景観が阿蘇の一番の特徴ですが、これが急速に減少しているというのは、皆さんもご承知のとおりです。

こういったものを、このプロジェクトの中でどう考えていこうかということです。テーマ1は、島谷先生のグループが福岡あるいは熊本の都市圏と阿蘇の関係性の中で、いろいろ生

水源涵養や国土保全の役割を果たす草原

- 阿蘇の年間降水量は全国平均の約2倍。
- 外輪山や阿蘇五岳などの山裾にしみこんだ雨は、1500箇所以上ある湧水となり、6本の一級河川となって海に注ぐ。
- 熊本市を中心とする11市町村の熊本地域に住む約100万人の飲料水を地下水で賄っている
- 6河川流域人口は約230万人。加えて福岡導水で福岡都市圏250万人の水源。阿蘇の人々だけでなく九州中・北部の地域を潤す。
- 草原が管理されずに放置された場所
⇒土砂流出や崩壊も多く見られる。



面積：2万3000ha
(我 国最大の草原)



図3.九州の水源としての阿蘇

態系サービースと呼ばれるような自然の恩恵、それから防災や減災を考えてみようということです。

次のテーマ2は、かなり水に焦点を絞ってしまっていて、水の中でも地下水と主には農業用水を調べる。特に地下水に関しては、市川先生が長年、阿蘇の地下水の動態を調べてらっしゃいますので、かなり社会科学的事実というよりは自然科学的なアプローチで水のことを扱うことになっています。

テーマ3の私たちのところでは、防災とか、生態系の機能を踏まえ、人間側に主にアプローチをしようとしていて、私たちが自然資源をどう使うのか、あるいは当然、それを支えるのは人間という部分もありますので、社会関係資本にも着目しています。まさに上野先生のご専門のところ、人間と自然の資源の関係性を社会的に見ていこうとしています。

時間も限られているので、最後になります。私たちのところでもやろうとしていることは、実際にはまだ始

まって半年ぐらいで、成果をお見せするところまでいっていないのですけれども、先ほど話したように、九州の北部の地形図を見ても、まさに阿蘇というのは九州のど真ん中にある様子がよく分かります(図3)。そこから6本の川が流れ出ています。特に、熊本側に赤くハッチがかかっている所が、いわゆるDID地区といえますけれども、人口密集地です。そういう場所というのは、特に福岡、北九州とか、沿岸部にありますが、逆に言うと、水資源を支えている阿蘇の地域には、DID地区はほとんどないわけです。つまり、使うほうには当然人がたくさんいるわけですから、資源を支えるほうには単純に見ても人手が足りないことは分かります。

図4は、これが見たい100年間で、阿蘇の草地だったり、森林、土地利用の変化の様子です。一番典型的なのは、黄緑色が草地で、濃い緑色が森林です。どんどん森林が増えていく様子が分かります。

今後、私たちのほうで将来、どうなっていくのかという

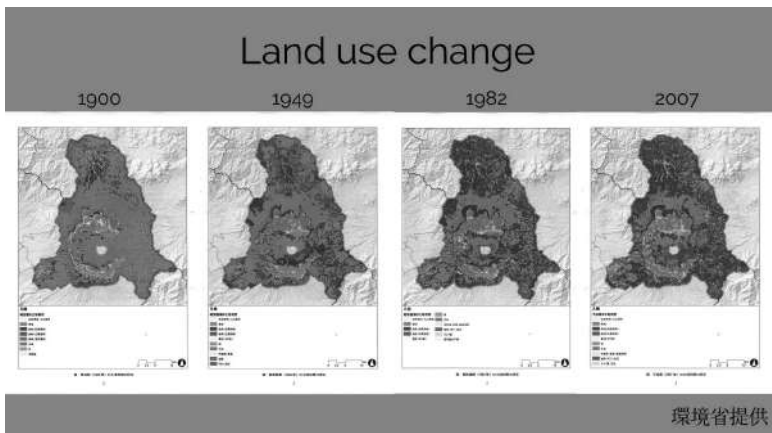


図4. 100年間の阿蘇の草地の変遷

ことも予測しませんが、まだモデルに入れて予測はしていませんが、たぶんこの図で見るだけでも、ほっておけばというか、このままいけばほとんど森林になるんだろうというのが、容易に想像がつかます。

その中で、今の阿蘇地域、ここでは7市町村に限っていますけれども、抱えている現状を簡単に見ていきます。

これは人口の現状と予測です。予測は2045年まで入っています。それぞれ元の人口もいろいろですけれども、阿蘇市が一番多いですが、ものすごい勢いで減少していく様子が分かります。

その中では、今の人口はそれほど大きくないわけですが、西原村に關してというと、減り方はそんなに大きくない様子が分かります。当然ですけれども、阿蘇地域の中だけを見ても、変化のおき方は自治体によつてずいぶん違いもあります。

阿蘇地域における各自治体の産業構造について見ましよう。すると阿蘇市は農業が結構大きいことが分かりますけれども、ただ比率でいうと、二次産業が圧倒的に多いです。ほかにも西原村の場合には、機械、あるいは製造業、食品加工業の割合が大きくて、それに比べると農業というのはごくわずかなわけです。あるいは、対個人サービスというのは観光の部分はかなり大きいと思うんですが、南小国であったりとか、南阿蘇がその比率が大きい。

そうすると、特に草原のことに關していえば、それを支えるのは必然的に農業であり、さ

らに畜産、放牧ということになるわけですが、それぞれの地域にとって、当たり前ですけれども、農業の割合が非常に小さくなっている現状というのは、皆さんにも感覚的にもよくおわかりいただけるかとおりで、それはデータでも出てきます。

特に阿蘇に関していうと、特産のあか牛が伝統的には牧野を支えてきたわけですが、昨今、黒牛が増えているとも聞きます。草原維持再生基礎調査報告書を元に、それぞれの市町村で、あか牛と黒牛はどのぐらいいて、どういう比率になっているか見てみますと、例えば、阿蘇市が一番頭数が多いですが、もう黒牛が圧倒的に多くなっているということなんです。逆に、南阿蘇は非常に特徴的だと思うんですけど、ほとんどあか牛で頑張っている様子が分かってきます。

ただ、もう一方で、先ほどお話ししたように、一次産業と農業という意味では、実際には生産性という意味ですけれども、非常に割合が少なくなっていて、さらにはこういった牛たちが必ずしも放牧されていないという状況もあります。今まで農業、畜産業に支えられていた草原というだけでは当然ですけれども、たぶん維持管理が大変なんだろうなということが、よく分かるということになります。

最後に、エネルギーに関することですけれども、赤色はどのくらいエネルギーを使っているか(図5参照)。それは総生産に対してどのくらい使っているかということなので、上のほうに行くほど、たくさんエネルギーを使っているということですね。稼いでいるお金に対し

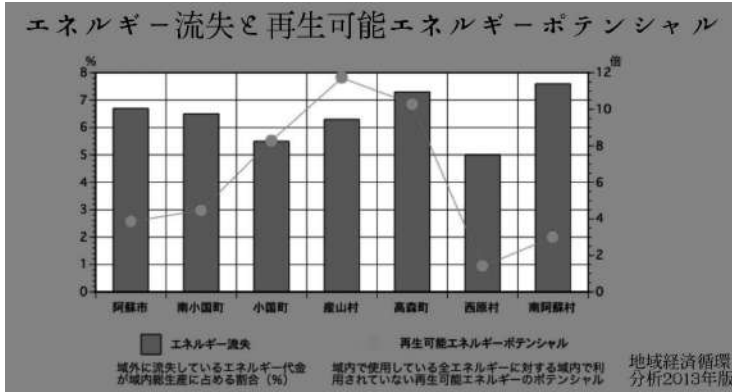


図5. 地域のエネルギーポテンシャル

て。点は環境省が調査しているんですけども、その地域で使い得る、主に発電し得る再生可能エネルギーのポテンシャルが、自分が使っている分に対してどれくらいあるのかということを示しています。例えば、産山村で見ると、12倍ぐらい可能性がある。つまり、ほとんど使われていない。西原村の場合には、2倍ぐらいなので、ちゃんとまだ調べていないのですが、結構取り組まれているということかもしれないし、あまりそういう余地がないのかもしれないです。いずれにしてもエネルギーの流出とというのは、要は石油やガスというのは、当然、域内で生産できませんので、その分のお金はどんどん地域の外に出てしまっている。下手すると、国から出て行ってしまっている。なので、地域の中で再生可能エネルギーを使うというのは、よく言われることですけれども、流出を非常に手取り早く止めることでもあると考えます。もう一つ、国立公園ということを見ると、なかなかそれは簡単ではないというのが阿蘇の現状でもあります。

そういう中で私たちが何をしようとしているかというところ、例えば農業だったりとか、観光とか、コミュニケーション、あるいは再生可能エネルギーとか、産業だったり、あとは人のつながりみたいなもので、実はいろんな範囲みたいなものができているわけです。実に当たり前ですけども、人間の社会はそんな多様な関係性が複層的、重層的に関わりあっています。こういうことがたぶん複雑になっていることが、災害などがあつたときに、実は地域がまたそこから立ち直っていく力、こういうのをレジリエンスといったりしますが、その強さにながっているのではないかというのが、私たちの一つの仮説です。

もう一方で、これはちょっと全然違う地域で、ただ単にポンチ絵で出しているんですけども、今のままでいくと、当然ですが、土地利用もドラスチックにこれから数十年で変わっていくます。それをまた、こちら側、人口の配置を考えると、急激な人口減少をしていく中で、本当にそれを維持できるのかどうかということも考えていかないとけません。私たちは2050年をターゲットとして、土地利用がどうなるか予測をし、かつ、2050年ぐらゐまで500メートル・メッシュで人口の予測も出ていますので、それと重ね合わせて自然資源の維持管理についても検討していきたいと思っています。私からの話題提供は以上です。



第3章 「地域循環共生圏形成のための『学び』について」

熊本大学・熊本創生推進機構・准教授 田中 尚人 氏

皆さん、こんにちは。熊本大学にいます田中と申します。今日は、「地域循環共生圏形成のための『学び』について」ということで話させていただけようと思います。

先ほど、一ノ瀬先生からお話がありましたけれども、私どもの熊本大学でも、私の所属している熊本創生推進機構というところで、上野先生をはじめ、チームをつくって地域循環共生圏、先ほどお示しいただきました曼荼羅図の中で研究活動をしています。

私は、もともと出身は土木ですので、曼荼羅図の中でも、「災害に強い町」という部分に関心があります。熊本地震もありましたし、つい先週、先々週ですか、長崎や佐賀のほうで豪雨があつて、今も避難されている方がおられます。

最近、災害はどこで起こっても、いつ、どんな災害が起こるか分からないという時代で、私たちはどういふふうに地域づくりをしていくべきかということについて研究しています。

この写真(図6)は、私が大好きで最近ずっと使っているものです。皆さんもどこかで見られたかもしれません。熊本地震の後に、よくご存じの水前寺成趣園で水が枯れました。そのため、湧水がわきにくくなっているところの砂利をどかしたり、ポンプアップもしましたが、



図6. 水前寺公園で湧水復活ボランティア活動

この時の活動にすぐく地域循環共生圏の一つのモデルを見ました。私たちがすぐく好きな熊本を代表する水前寺の風景を、人の手によって再生させようという試みに、地元の子どもたちもおられるんですけれども、ボランティアの方、県外の方も一緒になって、こうやって復興させようという共同行為が実現された、まさに地域の風景と人々の関係というのを、よく表した図ではないかなと思います。

私は県外でもお話をすることがありますけれども、その時も熊本はこのように地域の人々の手によって復興していくんだよという姿をよくお見せしています。

私どもの熊本大学では、私自身もそうですけれども、熊本地震の前から、阿蘇地域の研究をずっとしてきました。その中で、やはり独特なのが、ここではコモンズと書いてあり



ますけれども、入会地ですね、私も少し関わっていますけれども、上野先生たちが草地などいろいろな畜産の食料になる草地の研究をされています。誰の土地でもないし、誰かの土地でもあるという、草地・入会地というのは、いろんな魅力が詰まっています。

従来、コモンズというのは、「コモンズの悲劇」という言葉が有名ですが、要は牧草と違って、誰でも食べていいよとしてしまうと、フリーライドしてくる人が出てきて、それを全部使ってしまうて困ってしまうねという話です。

今、コモンズの議論の中では、「コモンズとは、ある資源から恩恵を受ける人々が、ルールを守ってその利用を行い、必要な維持管理を行うならば、皆、大きな恩恵を受け続けることができる」という、割と肯定的な研究対象として扱われています。

ここにも社会学の先生方がたくさんおられると思いますけれども、私たちはどちらかというとインフラを管理する立場にあります。地域マネジメントであるとか、地域資源の有効な利用という

面で着目しています。

このルールと書いてあるところが、私の興味があるところでして、熊本の人だけではなく、日本人というのは公明正大なルールというのはどちらかというと法律であったり、あまり得意に思われないところがありますが、逆に慣習であるとか、地域のお祭りとか、不文律みたいな暗黙知に関しては、すごく豊かな文化を持っているのではないかなと思うのです。

風景の共有というか、同じ風景の中で暮らしてきたという地域のプライドみたいなものが備わっているなど感じていまして、そのあたりを私は研究していこうと思っています。

私たちの土木や景観研究で対象にしているコモنزというのは、一般的なコモنزとは少し違うかもしれません。例えば、道路ネットワークです。これは西原村の小野という集落です。また後でお話ししますが、集落の皆さんが道路愛護というか、道路清掃活動をされているところになります。このような道路ネットワーク以外にも、これは南阿蘇村の塩井社水源です。私が熊本に来て初めて阿蘇を訪れたときの写真です。すごく透明度が高くて、こんな素晴らしい水辺があちこちにあります。特に塩井社水源の場合、すぐ隣が神社というので、水が湧いている所に神様がいて、そこに人々が住まうという、すごくプリミティブ (primitive) かもしれませんけれども、とても理にかなった場所だと思っていました。

このように、私が考えたコモنزというのはインフラストラクチャーなわけです。けれども、皆さんの生活の基盤になっているところが、例えば、熊本地震の後に行くと、水枯れに

なっていたり、熊本地震の後、道路やネットワークが崩壊したりと、酷い状況が起きました。今日は県の方も来られているかもしれないかもしれませんが、私の教え子も三日三晩、ずっと道路の補修だけで過ごしたと言っていました。

私たちが当たり前と思って使っている社会インフラですが、一旦災害などでなくなってしまうと、そもそも神社があつて、神様もいるのに、水がなくなったらどうするの。本当に暮らしの基盤が失われる、その時に私たちはどのように地域を再生していけばいいのか。

先ほど、一ノ瀬先生からレジリエンスといった話もありました。レジリエンスというのは、強靱化や、回復とか、いろいろな翻訳の仕方があるわけですが、私は回復することではないかな、あきらめないことが大事だと思っています。そういう中で、コモンスとしてのインフラストラクチャーを考えていきたいと思っています。

日頃、まちづくりばかりやっていて、研究をやっているのかどうかと心配されるんですけども、このような研究を日々しています。私は風景の保全が仕事ですので、単に暮らすだけではなく、その中にどのような仕組みがあるのかということの研究しています。

上野先生のご専門にソーシャルキャピタルという概念があります。地域の紐帯という言葉の方をと思いますけれども、そのように人と人が信頼を得るためには、やはりそのネットワークというものがありません。私の場合、インフラというのがネットワークなので、道路でちゃんと、あなたのところに行けますよね、あなたのところに行けますよという関係があ

るから、人はその道をつたっていくのであって、信賴していても行けなくなってしまう、ネットワークが切れてしまうと、そもそも行けなくなる。それではどういう単位で、人々はコミュニケーションをつくっているのでしょうか。

実は道路というのは、私たちが通れるのは当たり前だと思っと思っていますけれども、昔は道普請といって、江戸時代までは自分たちが通る道路は自分たちでつくるというのは、そんなに難しいことではなかったそうです。熊本は特に、近世の時代は「手永」という制度があって、地方地方で、自分たちで必要なものを作っていたと云われています。

有名などころでは、通潤用水とかありますけれども、地域で必要なソーシャルネットワークは自分たちでつくっていくんだという文化があったと伺っています。そういうセルフフィードといいますが、自分たちでつくって、自分たちで管理する。そのために、どのような使い方をすればいいか。溢れるほど使ってしまうと、どうしても枯渇してしまうような自然エネルギーなどを、どのようにルールを作って持続させていくのか、二つのローカルルールというものを考えていきたいと思っています。

今回、西原村を対象に考えていきたいと思っています。皆さんご存じのように、熊本空港があつて、その近くに西原村があります。もう今から、かれこれ60年ぐらい前になりますけれども、阿蘇郡の山西村と上益城郡の河原村が合併した地域です。人口の推移などを見ても順調に増加しています。阿蘇地域に含まれますけれども、熊本の市街地にも近くて、熊本空港がある

ということ、熊本地震の前までは人口が実は増加していた地域になっています。

私もずっと仕事で関わっていた中で、阿蘇の市町村というのはそれぞれ特徴的ではありませんけれども、阿蘇のカルデラ外にあっても阿蘇だという西原村の独特な地域というのは面白いと見ていました。

そこで、熊本地震が起きて、やはり亡くなった方ももちろんおられますし、深刻だったのは住宅の被害です。全戸の内、全壊は22・8%、半壊以上は55・8%ということで、そもそも暮らしの基盤となるお宅がなくなっていることが、すごく大きな問題だと言われています。

実際、私たちが熊本地震の後、調査に行つて、後で議論に加わっていただきました内田さんに案内していただいて、布田集落であるとか、大畑畑集落など見て回りました。家屋の被害も相当なものですけれども、インフラである道路が使えなくなっているということ、私たちも行ける所まで車で行つて、あとは自転車や歩いて回つたのを思い出します。

私はずっと災害の研究ではなくて、どちらかというと日常の暮らしの研究、歴史学専門ですけれども、そういう関係で、今年、熊本地震から3年たったときに、やはり普段から、生活防災とか事前復興と言ったりしますけれども、日常的につながっている関係や間柄が、まさかのときに役立ちますよということを文章に書かせていただきました。

そういう観点から、今日も南阿蘇村から来ていただいていますけれども、坂本さんたちと

一緒に、「きらめきプラン」というのをやりませんかというので、集落でワークショップをやつて、地域の方と役場の人と、「うちの村がどうなりたいか、うちの集落がどうなりたいか」というのを一生懸命考える活動をしています。

こういうことをやること自体は実務として大事ですけれども、いつでも問われるのは、うちの集落の特徴は何だろうということにぶち当たるわけです。そもそも、うちの村の魅力は何だろうとか、そういうことについて、皆さん、日頃の生活が忙しいので、なかなかゆっくりに考える機会がなかったんですが、例えば、熊本であれば、3年前の熊本地震をきっかけに、そういうものをもう一度、考え直そうという機会があったのではないかと思います。

その中で、私たちは西原村の「道路品評会」というものに着目しました。西原村の方に聞くと、すぐく当たり前のように言われて、なかなかお話を伺わせてくださいと言っても、「何も言うことはない」と言われたりしますが、やはり外部の目で見ると、すぐく面白い。

例えば、なかなか伝統のある集落だと、新しく移住してきた人が地域になじめないことがあったりしますが、西原村は先ほど見ていただいたように、昔から移住者を受け入れて、その人たちが地域の構成員として、ちゃんと同じように村のための活動をされている。そのきっかけが道路品評会にあるのではないかなと想像しています。

道路品評会とは何かというと、西原村だと、春と秋の2回、多い所だと、お盆前にも草刈りをされるそうですけれども、道路沿いは放っておくと、このように草が茂りワイルドな感



図7. 西原村の道草刈り

じになってきます。これをちゃんと刈り払い機で道路の草を払い、ブロワーでポーツと切りかすを掃いていく（図7）。

この時に、先ほどもちらっと言いましたけれども、私は西原村出身なんだと、もしくは小野の出身だとか、そのように自分の出身地について思い至り、ここで生まれてよかったなということをお願いしたくなる。そういうのを「シビックプライド」と最近では言います。人々が町や地域に対して持つ愛着や誇り、そして自負みたいなものがシビックプライドです。そのようなものがここで役立っているのではないかと思っています。

内田さんと一緒に西原村に行かせていただいて、全部で43集落、だいたい1830戸あるんですけども、その中で1500戸ぐらいが参加しています。そのうち33集落は集落

の中もやりませんが、地区を繋ぐ沿線も管理する。一集落ごとに、いろんな大きさがありません。8戸から189戸ということですが、それぞれ一戸当たりになると、短いところで3メートルですけど、長いところだったら370メートルの草を刈るといようなことを、いわゆる区役として共同作業で担っています。

面白いのは、お金目当てというわけではないですけども、頑張ったところには、それなの、みんな、どこにもいたただける報奨金のほかに、等級別に、ちゃんと素晴らしく切ったところは一等賞というように表彰している。結局、全部賞はあるんですけども、その競い合いというか、せっかかくやるんだったら、自分たちできれいにしてやろうというように思いが共有されている。

もしこれを業者に委託すると、6千万円するところが、住民が自ら行くと600万円ぐらいで済んでいる。10分の1ぐらいです。お金の問題ではありませんけれども、このようにして自分たちで草刈りしているということを競争し合って、楽しんで地域力を高めましようということがこの制度には埋め込まれている。

今、パークマネジメントといって、公園の管理なども地域で頑張ってやろうということが行われています。同じお金を清掃業者さんに払ってすると、清掃業者さんはお金もらった分だけの掃除をしてくださるわけですけれども、それを子どもたちが公園で遊ぶお母さんたちにNPOをつくっていただいで、そこをお願いすると、わが子が遊ぶ公園なので、掃除も危

ないものがあつたらいけませんとか、花を植えましようかと、すぐく積極的に乗り気になってくださる。そのような管理の仕方というのも、アドプト（養子縁組）といえますけれども、そのようなことも含まれているようで、道路品評会の取り組みというのが面白いなと思っています。

これはちらっと見せていただいた品評会の審査用紙ですけれども、この辺り、地域の方で、村長さんもされているということでしたが、道路の清掃活動の目の付け所というのが客観的に設定されています。これから、このあたりを勉強させていただけたらと思います。

実際、このように住民代表による道路品評会の審査が行われていくわけです。私は、今はまだパイロット調査の段階ですが、2地域に入らせていただいて、お話を伺ってきました。

一つは、鳥子の葛目という所です。ここは熊本地震の被害が大きくて、今は6戸しかないということ、その6戸の方も今は災害公営住宅に住んでおられます。前区長さんにお話を伺って、「ほかの集落だと、70歳を超えると、道草切りに来なくても大丈夫だといわれていますが、ここは6戸しかないのです、総出でやっているよ」とか、「昨今、ボランティアの方にも手伝っていただいているよ」、という話を聞いています。

「でもやはり、地域出身の人に帰ってきてもらってやっている」とか、「終わった後はきれいになってよかったよ、終わった後、一杯のお楽しみ」という話を聞かせていただきました。

もう一つは、ずっと優秀賞を取り続けている小野という集落は移住者もおられて、50戸だっ

たかな、そのうち30戸は地元の方ですけど、新しい住宅ができて、子連れで移住者が来られて、新しい方も入っておられるということですよ。

集落の方にも色々なこだわりがあります、やはり道草を切って、その後、ブロワーをかけるんですけど、「二度切り、ブロワーとセットで」とおっしゃるんです。そのように、地域の道路清掃活動に対する愛着というか、すごく皆さんのこだわりがあって、傾斜地を刈る時も、村からはだいたい下から2メートルぐらいでいいよと言われてはいるんですが、うちは4・5メートルから切っていますとか、いろいろ極意を教えてもらいながら、道路についてのお話を伺っています。子どもの数も増えてきたとか、最近、続けてしていると、元気な話を伺いました。

今の段階では、道草切りは困難とは思えない。でも、高齢化が続いていると心配なので、今後、何か考えていかなければいけないということですよ。不参金というのがあって、出られない人はお金で済むんですけども、私たちはとしては不参金を支払っていただくよりも、ちゃんと来てもらって、一緒にそういう体験をするのが大事だというお話を聞いたりしました。あとは移住者には、水道の使用権と引き換えに、草切りの話をしてもらっているのと、いづれも感じたのは、新住民と旧住民の方が一緒にやるのがすごく大事だということ、そういうことをきっかけに、今、調査を行っている段階ですよ。

拙速かと思いましたが、今、調査を行って、今後まとめていこうかなと思ったときに、

暗黙知といえますけれども、ローカルルールという、地域の人は当たり前と思ってるけれども、幾つかの集落を比べてみると、当たり前じゃないよということがあります。

例えば、参加者です。小野の場合は参加者は基本的に地域住民だけでも、葛目の場合は人数が少ないというもありますが、一度、外に出て行った方も手伝いに来てもらっている。どちらがいい悪いではないと思います。集落の形態によって、私の友達が医王寺の出身で今は熊本市内で働いておられますが、ちゃんと消防団にも属しておられて、何かがあったら、「自分に行く」という生活をされています。そういう活動も全然あっても不思議ではないなと思っています。なので、外部的な環境と、ローカルルールと、あとはその地域の人たちの満足度というものに注目しています。

この後、マンツェンライター先生が「幸せ」についてお話しされますけれども、どんなに社会保障というか、行政サービスが優秀でも、それに対して地域の方々がどれだけ満足しているかということがマッチしてないと、もったいないことにもなりますし、持続可能ではないと思いますので、そういった達成感であるとか、地域の考え方についても考えていきたいと思っています。

では、私の発表をこれで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

第4章 「阿蘇の暮らしと幸せの研究」

ウィーン大学・教授 ウォルフラム・マンツェンライター 氏

ウィーン大学で日本学を研究しているウォルフラム・マンツェンライターと申します。よろしくお願ひします。

今からのお話は、申し訳ありませんが、まとまりのない話になってしまいかもしれません。「阿蘇の暮らしと幸せの研究」というタイトルは、ちょっと大げさなテーマですね。全体的にウィーン大学の阿蘇地方の研究の目的をまとめると、このようなタイトルになりました。

今回お話する内容は、今年3月、オーストリアの国立農産物研究所で発表させてもらった内容を使っています。日本の状況についてあまり詳しくないオーストリアの専門家に、私たちの阿蘇研究の内容を知ってもらうために、プレゼンテーションをしましたが、ここにお集まりされました人々にとっても有意義な情報だと思えます。

阿蘇が九州の中心にあるのはご存じのとおりです。ヨーロッパ人の私たちが阿蘇の研究をする理由は、阿蘇に特別な意味があるからなんですけれども、それ以外にも、阿蘇をひとつの事例として、現在の日本の地方に住んでいる人々の暮らしや、問題解決、戦略について、一般的、理論的なレベルで調査分析することにあります。



現代日本の農村地方の問題は何でしょう。地形的な分裂、土地利用についてのみならず、一番悩んでいる問題は、高齢化から始まって、地方再生などいろいろな課題がありますね。高齢化の問題は九州地方だけではなく、もちろん日本全体に広がっています。特に、地方型の県や地域の中で一番進んでいる問題は、統計地図にするとよく見ることができます。

九州の市町村の地方再生状況を見ると、阿蘇だけではなく、熊本県の中でもだいたい熊本市や郊外にある市町村を除いて、多くの地方で地方再生が結構深刻な状況にあります。国の支援、補助が入ってこない、全国的に見られる各々の構造的な問題が解決できないということは、この地図からもよく窺えると思います。

さて、基本的に構造的な問題が、どのように個人個人に影響してくるのかということは興味

深い学問的な問いです。たとえば「幸せ」のレベルは、個人の考え方の違いによって異なることが結構ありますけれども、社会調査の結果からは意外とみんな同じぐらいになるのです。「幸せとは何か」という定義はあまり厳密にできないですけれども、その結果は人それぞれだとも思われています。

幸せではない人生でも、ある程度、生き続けることはできるけれども、そういう制約の中では人間らしい生活ができず、それはその人らしい人生ではない。「幸せ」観が人生の価値を評価するという点を考えると、本当に生き方や幸福観は大切な問題である。

町と村と、都会と地方を比較して、暮らしや空間が、どのように地元の人々の幸せに影響を与えているのが、私たちの研究の主な目的です。それについては、さまざまな研究がありますけれども、基本的には幸せの研究は社会学的な視点から行われています。結構、新しい分野ですから、研究データが多いとは云えないですし、方法的な問題もいろいろあります。サンプリングと多様性、特に地方の声が、全国的な、または広範なデータの中に表れていないという問題があります。だから、分析の結果は一緒ではないんですね。結構、矛盾する結果が出ています。ある部分では町の住民にとって幸せでも、ほかの調査では反対の結果が出たりしています。

国際的なレベルで、日本人の幸せ度は意外に低いことで有名です。それにもいろいろな法的な疑問がありますけれども、今日は、そこまで触れる時間がありません。

都道府県で比べると、県のレベルで幸せ度に差異があるという調査結果もあります。例えば、博報堂が2014年におこなった調査の分析結果は、全国的に見ても西日本、九州、沖縄のほうが幸せ度が高いというものでした。そのほかの調査を見ると、地方の空間が独立的な影響力を持っていることが、今まで確認されてきませんでした。

熊本県では、2010年から県民の幸せ度を測る「熊本県県民総幸福量に関する調査(AKH)」がありました。2012年から2015年までに3回実施されています。その中で、私たちが特に興味を持っている阿蘇地方の満足度が、県民の平均以上に高いという結果が出ました。2018年の地震の後の調査の結果では、全体的に満足度が減少したようです。阿蘇地方においても満足度が減少しました。

蒲島知事のご協力のおかげで、私は3回の調査を二次分析することができました。その一つのデータでは、町と村、地方の区別を試しました。その地方のデータを、県のデータと比べました。その結果、幸せ度の必要条件は、町と村の間で結構違うことがわかりました。全体的な結果、幸せ度をまとめた数ではあまり差異が見えないですけれども、その中には何が集約されているかが、この分析から見えてきました。

インフラが整備されてなくても、ものが少なくても、何かいろいろな問題が地域に起きたりしても、地方には人間関係とか、支援集団があるから、それが住民の幸せ度を上げているのではないか、という仮説を立てることができると思います。それについてもいろいろな調

査があります。そしてその仮説を支持にする資料が結構あります。

ASO20という私たちウィーン大学が進めている研究プロジェクトの目的は、町と村の幸せの特徴についてですが、それは農村型の地方だけを調査することで確認できるため、農村型のところをフィールドとして調査をやりました。地区統合や人間関係が、住民の個人幸せ度を有意義的に向上するのかわかることを、その調査で確認しようと思いました。住民の判断についても、どのような違いが観察されるかということの研究してきました。

阿蘇を特に選んだのには、いくつかの理由があります。一番大きい理由は、私たちの先達たちが、50年前に最初に阿蘇に行って日本学研究を始めたことです。それはヨーロッパの日本学者が、始めて現場で調査をしたということでもあります。そのときの人間関係や調査データの集積が、研究者と調査された村民、町民の間のネットワークとして今日まで続いていますから、それが私たちのフィールドへの入り口になっており、結構うまく、調査データを得ることができました。信頼度が高いのは分かっていますから、スムーズに住民達の中に入り込むことができた。もちろん割合早いといっても、少なくとも3年ぐらいかかりました。ヨーロッパと日本を行ったり来たりして、いろいろなレベルでの情報交換と交流、集落の野焼き活動の支援など、信頼構築の過程にはいろいろあったんですね

もう一つの理由は、比較可能性があったことです。熊本県の県民総幸福量調査のデータもあります。それを使って、こちらの調査データを合わせれば、地方には独特な影響があるこ



一宮役場前の研究団のメンバー：E.パウアー、J.ク
ライナー、S.リンハートとR.リンハート



図8. ウィーン大学の阿蘇調査団

とが分析ができます。

これは50年前、最初のウィーン大学の研究旅行のときの写真です(図8)。最初に参加した若い研究者の姿が、一の宮町役場の前で撮影されています。その時に使った調査票は詳細には分析されなかったけれども、いまもそのまま残っています。当時、調査をしたご本人は、まだ元気なんですけれども、その調査票中にあつた情報にどんな意味があつたか、残念ながらすべては覚えておられないのですが、覚えていることだけでも聞き取りをして正確に分析できるように状況にしてみました。

それだけですと、分析結果が面白くないかもしれせん。なぜかという、前の調査では、基本的に経済状況というのは、農業が経済のメインだった時代ですけれども、農業、集落から

転出したら、暮らしや人生にどのような経済的な差異が出てくるのか、社会の手段が経済を整備しているか、宗教とかしきたりのレベルで、どのようにそれが経済基盤につながっているかなどを知るために調べたものだからです。

昭和30年代から現在までの一般的な経済構造の変化の結果は、もうみなさんご存知の通りなのですが、それをもっと長期に考えますと、過去の調査と今回の調査、そして将来的にも調査を続けるために、研究資料の結果を整理しようとするモチベーションが生まれてきます。そのためにいろいろなレベルで、たとえば私の同僚や大学院生、学部学生など多様な人たちが、今回の調査に参加しています。大学としても、研修旅行とか、院生の独立した研究など、いろいろな機会を設けて若者にも研究に参加してもらおうようにしています。

先ほど申し上げたように、50年間の変化はベータシクデータで見ると、人口減少と高齢化が顕著であることは、みなさんお分かりの通りです。私たちが今調査をやっている集落の変化は、それは典型的な、一般的に分かっている過程に相当していると思われる。その変化の過程で、家族の人数もだいたい減少してきました。50年前は、一戸に5人ぐらいの家族が同居していましたが、現在は2人暮らしになりました。典型的な変容を代表するのは、学歴レベルがアップした家庭なんですね。昭和38年、39年のときには、中学校とか、高等学校、農業専門学校がメインでしたが、今は大学まで普通に進学するというようにちょっとレベルアップしてきたことが見られます。

職業構成にも変化がありました。前は農業という職業の分野がメインで、だいたいみんなそうでした。現在は会社員が主流の職業に替わりました。

次に幸せに関連すること、一番大事なことに入ります。調査集落に住んでいる人々の社会的なベーシック・インフォメーションを見ると、昔からそこに住んでいる人が多いことと、世帯構造では親と同居が多いことがともに特徴的です。それはほかの地方でも同じですね。核家族の世帯が一番多いのですが、三世代同居の家庭も多く見られます。職業では、高齢化と農村社会構造変動から、年金暮らしが結構多く、また会社員が一番多いです。

それでは幸福度はどうでしょうか。その傾向は、熊本県の地方型の幸福度と対応しています。阿蘇では、幸せな生活を送っている人の割合が多いんですね。住民の3分の2は「とても幸せ」とか、「やや幸せ」なんですね。「幸福でも不幸でもない」は3割でした。

特に分析では、集落と阿蘇全体、そして阿蘇の地方型住民、阿蘇地方とを比較しました。その結果、調査集落は家族、教育、職業、財産に関して満足度は高い水準にあります。しかし自然や文化遺産、コミュニティへの誇りは他の阿蘇地域より低い水準にありました。なかでも家族関係、職業と教育という三つの分野は、特に高い水準でした。阿蘇地方より高いし、熊本より高く、県の平均よりも高いです。

ほかにも、消費生活や住宅状況については3番目の財産としてまとめた数字です。それも結構高いんですね。ほかのところよりも高いのです。満足度の中で一番低いのは、環境への

満足度でした。ほかと比べても、とても低い。それは最近、災害が多くなったから、その影響かもしれない。自然災害の脅威は人生の基盤を揺るがすような現実的な危険になりましたから、そこに住んでいる人々にとって居住環境はあまりよくないという結果が出たのだと思います。

女性と男性の考え方の違いについては、満足度の観点から考えると、どの分野でも、どの指数でも、男性はいつも満足度が高いという結果が出ました。熊本県の地方型地域と阿蘇市を比べると、男性の満足度はプライドの分野（自然、文化遺産、コミュニティ）で一番高いです。それも先ほどのスライドと比べると、こちらの二つ目の分野は、ほかのところと比べより低いんですね。男性と女性の比較だったら、男性は特に誇りが高いから、自然、遺産、コミュニティへの満足度が結構高くなっています。

これも先行研究で確認された知識ですが、一般的に男性より女性の方が幸せ度が高いです。けれども、集落の中で見たら、女性全体は男性全体より幸せではないんですね。特に若い女性、35歳から54歳、18歳から34歳、一番上の年齢層、彼女らは際だって不幸が高い結果になっています。

一番幸せなのは男性のお年寄りですね。女性のお年寄りも結構幸せです。とりわけ55歳からの女性は、同性の中で一番幸せという結果です（図9）。

なぜ、そういう結果が出るかを知るためために、相関関係、人間関係について分析しました。

Table 2: Descriptive statistics

Variable	N	mean/percentage	Std. dev.	min.	max.
Response	96	2.92	0.8	0	4
Age (2012-2015)	6,151	2.97	1.28	0	4
Gender	108				
female		55.6			
male		44.4			
Age	109				
18-24 (The Young)		9.2			
25-50 (The Early Adults)		17.4			
51-64 (The Late Adults)		45.6			
75-99 (The Old)		28.4			
Marital status	154				
married		15.4			
divorced		6.4			
widowed		4.8			
never married		15.4			
Residential history	187				
since birth		53.5			
since marriage		43.1			
moved in with parent(s)		2.8			
moved in		1.9			
Household composition	110				
single hh		4.5			
couple hh		10.4			
parental household		28.2			
adult(s) with parent		25.5			
3 Generation		25.5			
Employment status	149				
regular employment		29.9			
freelance/freelancing		7.3			
self-employment		12.7			
irregular employment/parttime		6.1			
retired		44.5			
house keeper		1.8			
student		1.8			
others		1.8			

- ・ 年齢構造, 成分別, 婚姻状態は
- ・ 長期滞在や父方共住制とともに特徴的.
- ・ 核家族の世帯が一番多く、三世帯家庭も多い。
- ・ 職業様様は高齢化と農村社会構造変動を代表する。
- ・ 幸福度とその配分は、大きく熊本県の地方型の幸福度と対応している: 3分の2は幸せ。

N部落と熊本県の地方型地域の幸せ		
幸福 域	熊本県の地方型地	
	N部落 (%)	(%)
不幸	0.0	3.4
やや不幸	3.4	6.7
幸福でも不幸でも	30.3	16.4
やや幸福	37.1	39.6
幸福	29.1	33.9
N = 89 2,699		

図9. 幸福度調査

最初に分かったのは、「幸せ」と「満足」は一緒ではないということ。基本的に満足度が上がることで、幸せ度の3分の1だけ説明できます。残りの3分の2は満足度とは別なことが幸せ度に寄与します。もう一つの結果は、満足度と地域、組織のメンバーシップや、義務的なメンバーシップ間に、有意義な相関関係があります。ほかの組織ではそういった関係は認められませんが、なぜかというところ、3番目の結果ですが、地域の人々は集落以外のクラブやネットワークに入っていることが殆どないんです。基本的には集落の中だけの関係性なのです。組織のメンバーシップについては、それは集落の中のメンバーシップでは基本的に個人でできるわけではなく、みんなが参加しなければならぬ義務的な会員制のようなメンバーシップ性であることもデータ分析で分かってきました。

共同事業に参加することは、ある程度、会員制、メンバーシップにオーバラップするということです。

れども、会員ではなくて、自分は入会しなくても、共同事業に参加することもある程度あるということも念頭に置いて、独自の分析をしました。その結果、幸せとの相関関係は見えなかったけれども、満足度には見られました。男性は共同事業への参加と幸せとの相関関係はありません。女性だけにはそういう相関関係があります。それはなぜか、まだ分からないですけれども、ある仮説があります。

次に、人間関係と幸せとか満足度の関係を調べました。そこにも幸せ度との直接的な関係が見られなかったんですけれども、満足度にはありました。特に集落以外の友人、そこに共感できる場がある場合には満足度が増加してきます。それも性別毎に見たら、有意義な相関関係は男性だけで、女性にとっては見られませんでした。

結論といたしますと、熊本県の地方型住民幸福度は、私たちが調査した集落においても、どこでも度数が高いです。町より高い結果が出ています。そして、男性と女性は生活感のステータジでそれぞれの差異があります。また若い人、お年寄りの中に、何が幸せかという点で差異があると思われまます。

地区統合と人間関係の関連についても、満足度を巡る影響がある程度あります。しかし、幸せには関連がないということについて、統計学的にいろいろな問題があります。ですから、どこまでそれが言えるか、それはまだ数字だけで、残念ながら答えが見つかっていません。

男性の満足度は、地区の組織への義務的入会があれば、あるいは集落以外の友人のネット

ワークが利用できる場合は、高くなる可能性があります。女性の満足度は、集落の共同事業への実践的参加のチャンスがあれば、上がってくるという結果も出てきました。そのチャンスを、今から実際にどう使っていくかということになると思います。

ご静聴、ありがとうございます。



第5章 パネルディスカッション

○安部 それではこれからパネルディスカッションに入りたいと思います。パネルディスカッションでは、先ほどご講演いただきました3名の先生方に加えて、阿蘇持続可能な社会研究所の内田安弘所長にもご参加いただき、討議をしていただきます。それでは、コーディネーターを上野先生、よろしくお願います。

○上野 内田さんに今日、おいでいただきました。内田さんは阿蘇郡西原村在住です。西原村もたくさんさんの共有地を抱えていて、若い頃からご自身も野焼き作業もなさってこられました。それから、熊本県庁や西原村役場でも環境行政に携わってこられましたので、共有地とともに暮らしている地域の方としての見方といいますか、お三方の話に加えて、ディスカッションとして内田さんなりのコメントを少しいただけたらと思います。よろしくお願います。

○内田 皆さん、こんにちは。阿蘇持続可能な社会研究所所長の内田と申します。



今、上野先生からお話がありましたけれども、一個人として、研究者の方々の研究活動と現場をつなぐ役目ができたらなと思っています。

お話がありましたように、3月まで西原の副村長をしておりました。任期の2年目に熊本地震があり、それから復旧復興に向けての仕事を3年間、行ってきました。まさに、創造的復興の悩みを抱えながら活動を行ってきました。

それから、その以前、県庁におりまして、環境部門、それから企画等々で仕事をしてきました。蒲島県政が「県民幸福量の最大化」ということで、県計画の一期目、二期目の担当ということで県民総幸福量の調査を行いましたけれども、そもそも課題として県民幸福量を測定できるのか、政策指標としてあり得るかどうかということ議論をし、その成果が先ほどマンツェンライター先生からお話があった指標でした。ですから、そういう幸福量の話、懐かしく聞いていました。

また、田中先生からお話がありました、

西原村の道路品評会の話。ビフォーアフターの写真は、実は私が草刈りした場所ですが、現場の人間としてご紹介しました。それから、草原再生では、地元の住民として「輪地切り作業」、西原では、それを「防火線切り」といいます。そして「火入れ」。これは西原で「山焼き」といいますけれども、そういう活動を若いときからずっと従事してきたということ、現場での経験をもち研究者の方々と地元を結び、地元の人たちの本質的なことを研究者に語り伝えるという役目が大きいのかなと思っています。

そういう中で行政マンとして環境政策にもずっと携わってましたし、個人的にも環境教育活動を20年ほどやっております。そういう視点から考えますと、今回新しく環境省が出した地域循環共生圏という提案は、個人的には時宜を得たものではないかなと思います。都市と農村の共生というような話から、概念的には分かるけれども、具体的にといったときに非常に分かりづらいものも含まれている。それをいろんな切り口から考察し、こういうものではないですかと提示するのが、今回の研究テーマだろうと思っています。

共通する話としては、やはり人口減少社会の中で、地域における今までの仕組みを維持する力というのが、すごく弱くなってきたという悩みがあると思います。草原再生にしろ、道路品評会も本当に担い手がいなくてボランティアに頼る集落が多く出てきていますし、先ほど出ました葛目という集落もほとんど人がいないのに、すごく長い距離を担ってやっている。場合によっては、前の日、その前の日から個人的にやって、それでようやく割り当てられた所の

清掃ができるというようなこともあります。

このように人口が減る社会の中で、どのように草原再生、道路の清掃、それからコミュニティを維持するかという大きな課題を抱えています。

現場にいますと、そこをもう少し、今の仕組みをよくすることで食いとどめることができ、こともあるのではないかなと実感することがありますし、ある面では、今回の研究成果の中で、少し仕組みを変え、新しい仕組みとしての主要な中山間地域や山村の集落が維持ができる仕組みや、草原が再生できる仕組みの話ができないかなと思っています。それを現場にいる人間として、違った視点で、先生たちに情報提供できればと思います。

本当に集落の中にいますと、高齢化し、人口が減って担い手が減るのを実感するばかりです。ただ、西原村では新しい住民の人たちが入ってきます。この人たちとどのように関係を結ぶかというの大きな課題としてあります。

ただ、草原再生の場合に、阿蘇の他の地域では牧野組合が管理するという一つの仕組みがあります。西原の場合は、集落ごとに草原再生に関わりますから、集落に入る、入らないというのが草原再生の狙いとして大きな話になります。ただこれには、目に見えない入会権の話をどう整理するかという大きな課題が目の前にあります。実は、この入会権でいろんな権利も発生し、大きな義務を負うわけですが、このあたりの整理もまだまだしなくてはいけない部分があるのかなというのがあります。

あと一つは、草原の話でいいますと、例えば、人口が減り、担い手が減る中で、いかに効率的な野焼きができるかということに、もう少し工夫があってもいいのかなと思います。

以前は、例えば、森林を整理する、間伐をすることによって道路整備ができたり、牧草地をつくることで道路ができたり、ある程度、基盤整備ができてきました。けれども、そういう理由がなくなつた今、本当に必要な草原の火入れをするための基盤といえますか、道路とか、そういうインフラが非常に整備しづらくなってしまっている。一度、壊れたら、なかなか修復することができず、またすぐに予算がないという話になっています。

今、林野庁の事業、それから農水省の事業、国土交通省の事業である程度、道路整備ができたものを、もう一度、草原再生という一つの視点に絞ったところで、その基盤としての、例えば、作業道の整備をどうするかという視点も必要なのかなと考えています。これには今回、地域循環共生圏の一つの、環境省の新しい視点を根拠にしたかたちでの施策があれば、それで予算がつき、そこで非常に効率的な草原管理の仕事ができるような道路の整備もできるようにならないかなと期待するところです。

あと一つは、たぶん、今後、議論になると思われるものですが、防火帯としての森林をどのように整理するか。実は、輪地切りという大きな作業がありますが、これは森林があるため、周りをずっと切らなければならぬわけですね。うちの集落でも、草原の中にポツンと森林があります。ですから、そこに火を入れさせないために、わざわざその周りの急斜面を



ずっと切っているわけです。火入れをするときに、まずそこをある程度、森林に火が入らないようにして、安全を確認した上で、下から火をつけるという作業です。もし、森林がなければ、ある程度、上のほうの上限の防火帯は切ったとしても、あとは下から火をつけるだけですむという話になります。すから、非常に効率的になります。

本当に少ない人数で野焼きを継続しようとすれば、森林を再整備するという、草原再生という視点での森林の再生という話があります。ただこれには、保安林指定されているところがなかなか解除できないので、木が切れない。保安林でなくても、経済的にペイしないところは、なかなか木が切れないという課題もあるので、これもどうにかして解決し、少人数で効率的に、かつ安全に草原が維持できる仕組みを構築していく話を、みんなで考えなければならぬかと思えます。

今、本当にボランティアの方たちの善意で、ようやく維持ができていますけれども、これも早晩、かなり厳しい状況になるだろうと思っています。多面的な意味からの草原再生の話をしなければならぬし、そこを支えるコミュニティそのものの自体の在り方ということから、草原再生も考える必要があるのかなという気がしています。

道路品評会につきましては、これは西原独自で、私たちは当たり前のこととしてやってきました。先ほどのビフォーアフターのところ、昨日、私も草刈りをしたんですけれども、自分たちの集落を草刈りするのは当たり前の話として、ずっとやってきました。これがやはり地域の誇りを生むようなところもあるのかなという気がしますし、地域への愛着を育む一つの仕掛けだし、コミュニティを維持するための大きな話かなと理解しています。どこでも年に1、2回はそういう清掃活動をやっていますので、コンテスト方式にするかしないかは別として、できたら、これを南阿蘇へ広げ、さらには阿蘇全体に広げるということで一斉にやったら、これは大きなインパクトになるかなと、個人的には思います。

この道路品評会の作業が持つ意味合いみたいな話を、田中先生の研究でもう少し掘り下げていただき、その成果を地元に戻し、自分たちの作業に対する誇りみたいな話を醸成できたら、もう一步、地域に対する愛着なり、その作業の意味合いも深まっていくのかなと思っています。

最後に、幸福度の話ですが、今、都会から田舎へという話があって、少し価値観の変化みたいな話があるのかなという気がしています。そういう意味で、地方が持つ可能性みたいな

話が非常に大きいのだろうと思います。

この価値観、幸福度の話、分析の中で、地域が持つ幸せ感にどういうものがあるかというのをやはり地元の人たちが再認識する、ないしはそこに住むことの誇りみたいな話を確認することによって、もっともっと地域に住む幸せ、ある意味では、そういうところに行って住むという意義みたいな話が醸成されることが、地方にとって本当に大事なかなという気がします。田園回帰とか、いろんな意味で、地域が、地方が見直される一つの流れができていますが、それを加速させるためにも、ある面ではここでいう地域循環共生圏の一つの考え方がある程度広げるためにも、やはり地域の役割と都会の役割みたいな話をきちんと認識できるような議論を、今回の環境省の提案をもとに作られたらと思います。以上です。

○上野 ありがとうございます。

やはり具体的な現場の話とリンクさせてお話しただくと、すごく課題が見えてきたかなと思っっています。

皆さん方にお尋ねしたいんですが、私たちは、阿蘇は草原が豊かな地域であってほしいと思っていますし、国立公園の中で地域を維持するための努力を地域の人たちは求められてもきているわけですよ。ほっとけば、一ノ瀬先生が言われたように、造林というのが自然を増やすよ方法だと捉えられて久しく、空き地があればスギを植えてきました。今後、入会地も管

理できなければ木を植えておきましょうという傾向も片方で進んでいる中で、草原と戦って、草原を維持してきた時代から、今度はほっとけば森になっていくものをどうやって草原にするのか。その動機付けや理屈付けが問われているのかなと思うんですね。

地域で暮らし続けていただくことで守られてきた自然ですので、当然、地域で暮らしているための所得がなければならぬ。それは、農業地域に工業を導入してきたり、あるいは最近、六次産業化のように、産物に付加価値を付けようとしたり、グリーンツーリズムを増やそう

としたり、さまざまな取り組みが行われていますが、地域の方々は本当に大変な、生きていくためには非常に知恵と工夫と努力が求められる状況になってきています。

さらに、国は政策として、そういうものをうまく補助金や規制でコントロールしたり、支援したりして、ある方向に持っていくようにしたりするわけですが、そういうものに沿いながら、人々は自分たちの生き方、暮らし方を考えないといけない。

他方で、経済的な条件だけで、私たちが未



来を決める理由はないわけで、片仮名語で恐縮ですが、「マイナーサブシステム」という言葉があるそうですね。サブシステムというのは生計を立てるということですが、これがマイナーということは、要は生計を立てるにあたっては、大して意味がないけれども、自然を相手に生きてきて、時には猪や猿、鹿は戦う相手であり、カラスもそうかもしれません。それから、きりのない草との競争をしながら、1年収穫を維持していきます。でも、自然と共に暮らしていく暮らし方自身に、すごく価値を置いた理解をしていらっしゃる方々にもたくさん農山村地域では出会います。

私たち、いわゆる都市に住んでいる人間がこういうことを議論するときに、そこに暮らしている当事者側の視点が抜け落ちた上で、経済的な観点からどう支援したらいいかとか、屁理屈付けをやりがちですが、当事者の方々が暮らしていく上での誇りや、あるいは今後それと関わっていく生き方をきちんと理解した上で、私たちに何ができるのか、そういう部分について、先生方のお考えとか、アイデアとか、事例とかありましたら、ご紹介いただけませんか。

○田中　私が西原村だけではなくて、今、上野先生がおっしゃったマイナーサブシステムというのは、東北に行ったときに、2枚目の名刺が大事だという話を、お百姓さんの話で例えられて知りました。お百姓さんというのは、百個仕事があるからお百姓さんだと。今は、

どうしても収入のメインは農業だとか、そういうふうに決まりつつある中で、いろんなことができる。

私たちも熊本地震のときに、1枚目の名刺が使えないときに、いろんな地域で例えば、釣りが好きだから釣りのクラブを作っているとか、子どもたちがPTAをやっているとか、いろんなつながりがあると役立つことがある。



一見無駄に見えるんだけど、長く関わっていると、地域を確かめる術になるなということは、例えば、内田さんもおっしゃいましたけれども、道草切りをしながらも、道草切りが目的ではないので、それは非常に自分たちの生活を支える上ではささいなことかもしれないけれども、それをやりながら、例えば、ここにひび割れができてくるよとか分かるようになる。

昔、武田信玄が山梨県甲斐市竜王に信玄堤しんげんつつみをつくるときに、そこをお祭りのルートにしたというのがありました。ただ単にインフラをつくるだけではなく、そこを日々、見守るような仕組みを埋め込むことがうまいみたいな話があり

ますが、西原村の当たり前と思われる道路品評会の仕組みは、いろんなそういうマイナーサブシステンスに気付くことができる、いい取り組みなのかなと思っています。

どうしても、よそ者なので、私は特に関西の人間なので、不思議だな、不思議だなんて思っ
て見ていたんですけども、知れば知るほど面白いというか、研究対象としても面白くて。
例えば、今回、地震ですごく人数が減った所を、区割りを再編したらいいんじゃないかとか、
すぐに安易に考えてしまうんですが、今は内田さんとお話をしながら、それはしてはいけな
いことなんじゃないかなと。逆に、8世帯とか、6世帯でやらなければいけない集落は、ど
うしてそんなに長い距離を今までやってきたんだろうみたいなことを、もう一度考え直す、
いい機会なのかなと思いました。

今日は事例を発表させてもらうことで、もう一度、考えるいい機会を与えていただいて、
今の上野先生のマイナーサブシステンスというの、要は外からの視線と、中の人が当たり
前に思っている視線を、ちゃんと機能的に分けているようだけど、機能的に分けられないよ
うなところの活動に着目して、私たちが研究することによって、深まることがあるのかなと
思います。それが、環境省がおっしゃる地域循環共生圏の一つの、地域の人が見えている風
景の中から紡ぐアクセス権というか、参加権になるといいなと感じました。

○上野 ありがとうございます。うまく私の疑問の中身を深めていただいたような気がしま

す。

実は、本当はゆっくりこの時間を取りたかったのですが、予定した時間が迫っています。今日は、阿蘇市や南阿蘇村、もちろん熊本市の方もいらっしゃいますが、いろんな地域から集まっていたいています。

登壇している先生方ともう少し議論を深めてと思っていたんですが、時間の関係もあるので、せっかくおいでになっていらっしゃる皆さん方から、今日の話とか、全体的なことでもいいですが、少し発言したいという方がいらっしゃったら、先にお伺いしたいと思えますがいかがでしょうか。

どうぞ、ご遠慮なさらずに。ないですか。ではマンツェンライター教授。

○マンツェンライター すみません、まだ話が続きますが。先に、当たり前と思っているやり方、それは過去から今までの状況では、それが一番いいというような、何とかなるという経験の部分が入っているかもしれない。もちろん、前と現在の状況を比べたら、変化はいつもありました。実は私は、構造より変化の過程を重要視したらいいかなということをよく考えています。

「誇り」というキーワード、それは地域の中においてとても大切なことと言われたんですが、うちの調査によって「プライド」というのは男性だけなんです。どうして、女性にプライ



共同事業に参加できるスペースが広がったら、満足度が高くなる可能性も集落のデータから分かってきました。それも面白いと思います。

未来を考えたら、問題は何か自然に解決されていくかもしれません。現在のパワー老人、マンパワーが強い現在のリーダーたちは、男女平等についての考え方が、次のジェネレーションと比べると大きく異なっています。自然な世代交代には、長いことそれを待たなければなりません、もうちょっと早く、何とかよい状況を手を入れる方法がもしあるのなら、そう

ドがないかという、お嫁さんとして入ってきた。50年、60年とずっと生活して、誇りの関係ができた、その構造とか、組織が女性にはないかもしれません。個人的にそれは面白いと思っています。誇りが男性はものすごく強くて、女性はあまり出てこないですね。

もう一つ、性別を考えたら、実際にコモンズの共同事業に参加することは、それは当たり前と思っている男性にとっては、満足度に関係ないんです。でも、当たり前と思っていないかもしれない女性にとっては、実際的に

した方が良いかも知れません。

○上野 ありがとうございます。ジェンダー、性別とか年齢で、ずいぶん考え方が違うんだということですね。そして変化を恐れずに社会を変えていけるのではないかということだと思えます。

手元に、内閣府の世論調査の結果というのがあります。実は近年、農山村地域への定住願望を持っている男女が、非常に増加している傾向が見られます。でも、一番増加しているのは20代の男性で、2014年の調査ですが、47%の20代の男性が農山村で暮らしたいと言っている。これはなぜかよく分かりませんが、突出して高い。

他方で、私たちが今日も問題にしてみました農山村地域の維持活動へ協力したいかというような、一般国民に向けて聞いてみますと、2005年から2014年にかけて、7ポイントくらい減少しているんですね。ですから、住みたいなというイメージ的なものはすごく好感度が増ってきているんですが、現実的にそういうものに関わっていくという、行動に関わる部分については、すごく減少しているという傾向があります。グリーンツーリズム的なものまではオツケーなかもしれませんが、そのもう一つ先まで、どうやっていけるのかですね。

一ノ瀬先生、先生は都市、農村、社会関係性も含めて研究されていらっしゃるんですが、どうでしょう、先ほどから出ている性とか、年齢とか、そういうものの違いをお感じにな

りますか。

○一ノ瀬 ありがとうございます。

そういう意味では、今、私どもの大学自体が首都圏にあって、首都圏にある大学というのは、ほとんど首都圏の学生しか来ない。慶応も早稲田も、実は70%以上が首都圏の学生です。その一方、南阿蘇村在住の卒業生が後ろにいらっしやいますけれども珍しい。

うちのキャンパスには、実は農学部もないんですね。でも新規就農しているような方もいます。あるいは、新規就農でなくても、まったく違ったかたちで農山漁村地域に関わって、あちこちで新しい革命的な動きをしているような学生もいます。

今、上野先生がおっしゃったように、一般的に首都圏にいる若者、学生、大学生を含めて、農山漁村に興味があるかというと、確かに、おっしゃるような傾向にあるんだろうなと思います。ただ、もう一方で、私自身もたくさん農村地域も歩いて、自分でそういう地域に住んだこともありますが、「ほとんど勘違い」だろうなとも思っています。ただ、勘違いがうまくいくことも若者にはよくあって、そこから何かが始まる。

若者の素晴らしいところは、勘違いしても突っ走れるところかもしれません。そういう意味でいうと、若者が結果的に活躍できるかというのは、もう一方で地域の包容力みたいなところもあるのかなと思っています。先ほども田園回帰というキーワードが出てきました。小

田切（徳美）先生も一緒に共同研究させていただいているんですが、小田切先生がいろいろ調べているようなところも、やはり地域のほうが受け入れる力というか、ワンストップで活躍してくれるスーパー公務員みたい方がいる、そんなことも見えてきているのかなと思います。



先ほど、上野先生からご紹介いただいた、住みたいとか、いいイメージを持っているんだけど、例えば、物理的にそこに関わってお手伝いとかできるかという問題。それはどちらかというところ、たぶん受け入れ先というか、農村地域のルールに従って力を出せるか、お金を出せるかといわれると、意外にめんどくさそうだなという印象になるのかなと思います。

今日、先生方のお話を伺いながら、いろいろ考えていて、先ほど、上野先生のマイナーサブシステムにも、すぐに何ていうんでしょう、こうしたらというの、はっきり言って、今、出てこないところがあるんですけど

ども。たぶん、そういう変化みたいなものを、どのようなかたちで、どのくらい受け入れるのかみたいなものが、きつと地域は考えなければいけないところにあるのだと思う。

もちろん、それはいいですと、中にはうちは「村納め」しますという地域も当然あるんですが、それはそれとして、このままではまずいと、かなりの方が思っている。そうすると、どんなふうを受け入れるのかとか、どんなふうにはほかの地域と連携するのかというのは、非常に難しいかなと思います。

今回、阿蘇の地域を見ていても、まだ私、本当に数年しか関わっていないくて地域のことをよく知っているわけではないですが、相当、阿蘇といっても違うなというのは、このところ分かってきたところでもあります。たぶん、それぞれの地域である程度、また異なる処方箋があるのかなと思っているところです。

○上野 ありがとうございます。内田さん、どうぞ。

○内田 マンツェンライター先生の話で思ったのですが、今回の震災を経験して、考えるべきキーワードとして、「愛着」という問題があります。なぜ、ある地域では地域に対する思いが強いのか。

先ほど、男性、女性の話がありましたけれども、今回、地震があつて、家を建て直す人た

ちも結構多いです。その時に、実は男性は今まで住んでいた集落に自宅を再建したいという人が結構多いんですけれども、奥さんのほうが危ないという理由で、集落を出たところに家を造られたお宅が結構多かったんですね。



聞くと、男性は、「いや、俺は元の所に建てたかった」という人が結構多かった。なぜなのかという話になると、人格形成時に、男性はその家で生まれ、育つてきて、結婚するまで育つ。その人格形成時に対する、土地、集落に対する愛着みたいな話は、かなり強い。ただ、女性は結婚して入ってきたという話で、非常に合理的にその住環境を捉える部分があつて、そこは非常に違いとして出るのかなというのがすごく感じた一つです。あとは、女性はやはり入った集落の中で、私の上さかみんもそうですけど、友達がいるときに、すごくその地域での居心地がよくなる。それはやはりコミュニケーションの中でできちんと存在できる、ないしは支えてくれる人がいるというのは、すごく満足度が高い話になるので、そういう仕掛けが田舎にもできれば、女性も過疎地と

いわれる中でも、すぐく豊かな生活が送れるようになるのではないかと思います。

愛着という言葉の延長線上で、道路をきれいにするとか、ある意味では道路をきれいにすることで愛着が生まれるかもしれないし、草原をきれいにする、野焼きに毎行くところに対して、草原に対する一つの愛着というか、想いみたいな話が、徐々に形成されて、習慣的になるというか、もう自分たちが行く中で火入れするのは当たり前だという話がずっと延々とつながってくるようなのがありやしないのかなという気がします。

ただこれは、具体的に論理立ててできるような話ではありませんけれども、そういう愛着とか、地域に対する思いみたいな話が、地域に住む意味での非常に大きなキーワード的なものになっているのかなと、震災の復興の過程で聞きたいろんな人たちの言葉の中で感じたことです。

○上野 ありがとうございます。

人々が地域に愛着を持つ、自然に形成される愛着の形成過程もあれば、災害のような危難のときに協力し合って、新たな人間関係性ができてくる中で愛着が生まれていくような、新しい地域が創生されていくことも、私たちのこれまでの研究の中で、少しずつ、田中先生とか、安部先生の研究の中からも見え始めてきました。

まだ、調査を始めたばかりですが、南阿蘇村の旧白水村の幾つかの地域を訪れて話を伺っ

ていますと、非常に興味深いんですね。今、移住希望者がたくさんいらっしゃって、家が足りないぐらい。云うならば、定住促進事業を放っておいても、やってけますみたいな恵まれた地域なんです。

でも、地域の中を見ますと、南阿蘇村という環境、空間に対しての愛着、憧れを持っている都市住民と、そこで暮らしてきた地元の人たちの愛着感は、どうもすれ違っているようで、移住者たちは移住者たちの世界に住んでいる。旧住民は、移住者たちとは交わらない集落で依然としたムラの暮らしが続いている。

西原のように、そこに住み着けば、区の人たちとして、みんな草刈りだとか、野焼きに行かなければいけないという、入り交じって行かせる仕組みがあるところと、そうじゃなくて、もう別々でいいです、ライフスタイルも違うし、目標も違うんだから。でも、同じ地域に、お互い衝突しないように生きていける空間がある地域もある。こういうところも、例えば、関東や信州の別荘地なども、そのように発展してきたんでしょうが、そういう新たな都市的な農村環境的なものが南阿蘇村に一部で見られるかなと感じています。こういう多様な地域が、それでも、牧野や原野を支えてきている。この中で、どんなメニューが可能なのかなというの、やはりそれぞれの地域特性をよく見ながら、その地域の方々が必要するものを何とか補えるような支援のやり方が一番いいのかなということを、ちょっと仮説的には思っています。

会場の後ろに、お菓子とコーヒー・紅茶を準備しています。このあと少し皆さん方とネットワーキング・ブレイクということで時間をとっています。あ、ご質問ですか。はい、どうぞ。

○会場から質問　今、上野先生もおっしゃったように、何か一つキーワードが見えたような気がしたものですから。

内田さんのお話で、道路の清掃にみんなが出役するということを言われましたよね。道路品評会という実態があつて、それが最初の内田さんのお話では、南阿蘇一体にも広がればと。まあ、南阿蘇から始まったものだから、要するに地域全体に広がればいいということだと思ふんですが、南阿蘇村に広がればよいという議論を支えるのは、西原は野焼きを区でやっておられると、そういうことじゃなかったですかね。だから、阿蘇のそれを一般化すれば、野焼き



は区でやりなさいと。牧野組合に任せないで、牧野組合だけでやらないで、区でやったらうまくいくんじゃないですかという問題提起じゃないかと拡張解釈したんですが、それは読み過ぎでしょうか。

○内田 それは非常に難しい問題だと思います。道路品評会といいますのは、西原村は5月、9月、あるいは盆前に一斉に、前は県道までやっていましたので、全村が公園化するんですよ。草を綺麗に刈ることで地域のイメージがごろっと変わる。そういうのを、例えば、南阿蘇一体で似たような時期にやれないか。どうせ草刈りはどこでもやっているような話ですから、時期をある程度そろえることで、大きなインパクトを与えるんじゃないかということ、広がればいいなと。それが阿蘇全体に広がれば、イメージの変化も阿蘇全体に広がると思っています。

ただ、野焼きの話は、入会権の話と非常に絡んでいるので、これは一筋縄ではいかないと思っています。西原の場合は、入会権の話は少し棚上げしながら、集落に入れば、いわゆる野焼き、山焼きに出れば、ある意味では入会権を与えたのと同じような話に個人的にはなると思っているんですけども、まだその議論が深まっていないんです。ただ現実として、集落である程度、集落に入れば、山焼きに行くという話になる。その整理も未整理なまま、草原が維持されているというのが現状です。ところが、南阿蘇では、牧野組合の人たち、ボランティア

アに来る人たちは入会権は関係ないという話の中の野焼きだし、個人の牧野があったりしますので、野焼きの権利関係も含めて、先ほどの作業の効率化を含めて、結構、議論が広がる話かなと思っています。

○質問者 どうもありがとうございました。

○上野 この機会に、閉会のあいさつまでさせていただきます。本日ご登壇いただいた先生方、貴重なお話しをありがとうございました。また毎年開催しております熊本大学の政策フォーラムに、貴重な1日を使ってご参加いただきまして大変ありがとうございました。今日は福岡や阿蘇など遠方からお越しいただき感謝申し上げます。これからも私たちは、この研究課題をさらに深めていきたいと考えています。どうぞ皆様のご支援をよろしく願います。

○安部 以上をもちまして、令和元年度熊本大学・熊本創生推進機構及び日本地域政策学会・九州沖縄支部主催の政策フォーラムを終了させていただきます。



講師紹介

一ノ瀬友博

所属…慶應義塾大学・環境情報学部・教授

専門…緑地計画学、博士（農学）

講演題…「自然資本と社会関係資本に着目した地域循環共生圏の重層性構築」

○田中尚人

所属…熊本大学・熊本創生推進機構及び大学院先端科学研究部・准教授

専門…景観工学、土木史、博士（工学）

講演題…「地域循環共生圏形成のための「学び」について」

ウォルフラム・マンツェンライター

所属…ウィーン大学・日本学研究科・教授

専門…日本学、日本農村研究、スポーツ社会学、博士（日本学）

講演題…「阿蘇の暮らしと幸せの研究」

内田安弘

所属…阿蘇持続可能な社会研究所・所長

専門…環境行政、自治体経営など。熊本県企画振興部総括審議員や西原村副村長などを経て
現職

ディスカッサント

主催スタッフ

○上野眞也

所属…熊本大学・熊本創生推進機構及び大学院社会文化科学教育部・教授

専門…政治学、行政学、博士（公共政策学）

コーディネータ

○田中尚人

所属…熊本大学・熊本創生推進機構及び大学院先端科学研究部・准教授

講師紹介に同じ

○安部美和

所属…熊本大学・熊本創生推進機構・准教授
専門…環境学、防災学、博士（地球環境学）
司会

○ヨハネス・ヴィルヘルム

所属…熊本大学・熊本創生推進機構・特定事業教員
専門…民俗学、哲学博士
フォーラムの運営、研究報告

○村上長嗣

所属…熊本大学・熊本創生推進機構・政策研究員（菊池市役所からの派遣）
研究テーマ…地域振興
フォーラムの運営

日本地域政策学会・九州沖縄支部理事

- 辻 利則・宮崎公立大学・教授
- 山下永子・九州産業大学・准教授
- 岩橋浩文・熊本学園大学・准教授
- 石田 聖・長崎県立大学・講師
- 渡辺陽司・熊本県職員
- 園田賢太郎・熊本県菊池市職員



地域循環共生圏を考える—阿蘇の草原維持と都市・農村の暮らしの共生—

2019年12月24日 発行

発行／ 熊本大学 熊本創生推進機構 地域連携部門

編集 上野真也、村上長嗣

郵便番号 860-8555

熊本市中央区黒髪2丁目39番1号

TEL 096-342-2044 FAX 096-342-2042

<http://www.cps.kumamoto-u.ac.jp>

https://www.kumamoto-u.ac.jp/kenkyuu_sangakurenkei/

[sangakurenkei/kico](https://www.kumamoto-u.ac.jp/kenkyuu_sangakurenkei/kico)

KIDO 熊本創生推進機構
KUMAMOTO UNIVERSITY